

令和 2 年度

富谷市市民協働セミナー実施報告書



事業概要

日 時	令和2年12月22日（火）午後1時30分～午後3時00分
場 所	富谷市役所 302～304会議室
目 的	本市総合計画に掲げる「市民の思いを協働でつくるまち」を一層推進するため、市民が協働の基本的な考え方について理解を深め、協働の意識を高めるとともに交流の機会とするため、市民向けに開催するもの。
テ ー マ	（仮称）富谷市協働のまちづくり推進指針中間案について ～わたしたちの協働指針をつくろう！～
座 長	宮城大学 事業構想学群 准教授 富谷市協働のまちづくり推進審議会会長 佐々木 秀之 氏
参 加 者	一般参加 12名 富谷市協働のまちづくり推進審議会委員 7名 富谷市 5名（市長、総務部長、市民協働課3名） 傍聴者 3名

市長あいさつ



皆さんこんにちは。本日は富谷市市民協働セミナーということで、若干気温は暖かく感じるものの、今回の大寒波によりまして大雪に見舞われて、足元の悪い中皆様にご参加いただきましたこと、まずは心より御礼を申し上げます。また、今回も大変お忙しいところ座長を務めていただきます宮城大学の佐々木先生、本当にありがとうございます。そしてまた、今年の8月に行ったとみやわくわくミーティングにも、審議会の皆様に毎回ご参加をいただいております。本日も審議会の皆様にご参加いただきましたこと、改めて心より御礼を申し上げます。

さて、まずは私事でございます。この度は新型コロナウイルスへの感染ということで、市民の皆様、多くの皆様に多大なるご迷惑をお掛けいたしましたことをまずは心からお詫びを申し上げたいと思います。私自身、感染対策を先頭に立って努めてまいりました。そしてまた自分自身も感染対策を徹底してきたつもりではございましたが、改めて今回罹患して、コロナの怖さ、感染症の恐怖というものを身をもって知らされたというのが正直なところでございます。

そういった中で改めて医療現場の皆様はじめ、PCR検査や保健所の皆様が自ら感染リスクを抱えながらも命がけで現場で戦っていて、本当に多くの皆さんにお世話になりました。言葉にできない感謝の気持ちでいっぱいでございますし、そういった方々が本当に厳しい環境の中で今まさに戦っているということを直接肌身をもって感じることで、実情も見ることもできたところでございます。また、その方々がまだまだ整った環境にないということも改めて実感するところでございまして、罹患した者として感染対策の徹底にはもちろんですが、そういったコロナの最前線の現場で戦ってい

る、頑張っていたいただいている方々への支援または環境の改善といった色々なところで、今回の経験を生かしてさらにコロナと戦っていきたいと思っているところでございます。まだまだ感染が拡大している中でございますが、今後もしっかりと感染対策をとっていきたいと思いますのでどうかご理解賜ればと思います。

改めて本日は市民協働セミナーということで、今年度の7月に審議会をスタートさせていただきまして、8月の28日、29日には3回に分けてわくわくミーティングを通して皆さんにご参加をいただき、この市民協働のあり方について色々ご意見をいただいたところでございました。それを踏まえて今回は中間案ということで取りまとめいただき、併せて一般の皆様にはパブリックコメントでご意見をいただいたことも含めて今日は皆さんにご意見をいただき、年度内にこの指針についてしっかりと固めていきたいと思いますので、限られた時間ではございますが、皆様方にご意見をいただければと思いますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

座長あいさつ



皆さん、本日はお忙しいところお集りいただきまして、ありがとうございます。宮城大学の佐々木です。新型コロナウイルス感染症禍において誰が感染してもおかしくないと言われている状況で、県内の大学でも講義の休講を行っている所がある中ではありますが、やるべき事はやらなければならないという現状もあります。

今日は、これまで2年間かかって作ってきた、協働のまちづくりに関する指針を固める、最終段階となります。これはやはり行政側だけで決めることはできないものであり、とはいえ、大勢の方にお集りいただくことも出来ないという状況です。そこで、これまでの会議にご参加いただいた皆様にお声がけし、このようにお集まりいただきまして、協働のガイドラインの最終確認を行い、主にタイトルを皆さんと一緒に決めていきたいと思い、この場を企画させていただきました。短い時間での進行となり、そしてまた、今日は答えのない議論がテーマでもありますが、ぜひ活発に議論を進めていただきまして、出た意見をもとに、まとめていきたいと思っております。

情報提供（担当課）

～資料②「(仮称)富谷市協働のまちづくり推進指針(案)の策定経過について」に基づき説明～

はじめに、富谷市におきましては、市制移行を機に、協働の手法を再認識して、よりよいまちづくりを進めていこうという機運や取組がこれまでも増して高まっており、まちづくりに関わる様々な主体が、共に力を合わせ、まちづくりに取り組むための考え方や方向性を共有することを目的として、指針・ガイドラインの策定を進めることとしたものです。策定までの経過につきましては、これまでの進め方として、市民の皆様の見解反映に重点を置きながら進めてまいりました。本格的に策定作業に入ったのは、昨年度からになります。令和元年7月のとみやわくわく市民会議、11月の市民協働

セミナーにおいて、市民の皆様のご意見を伺い、さらに、1月に富谷市協働のまちづくり推進懇話会を設置し、年度末にまちづくりの基本となるルールの素案をとりまとめたところです。

また、今年度に入ってから、7月に富谷市協働のまちづくり推進審議会を設置し、ルールの策定について諮問しました。その後、8月のとみやわくわくミーティングにおきまして、本日ご参加いただいております皆様から指針案についてのご意見を伺いました。その意見を踏まえ、とりまとめたものが、事前にお送りしております中間案でございます。なお、11月から12月にかけて実施したパブリックコメントでいただいた意見につきましては、これからとりまとめていくこととしております。そして、本日の市民協働セミナー及びパブリックコメントでいただいた意見を十分に反映した形で、来年1月に審議会より答申をいただくこととしております。その後、2月に市議会へ最終案の報告を行い、3月に策定、4月に公表というスケジュールで進めてまいりたいと考えております。

本日の市民協働セミナーでは、指針案のタイトル、サブタイトルについて、皆様のご意見を伺って決定していくこととしております。このタイトル、サブタイトルは協働のまちづくりの重要なキャッチフレーズとなりますので、最後まで、皆さんと作り上げていきたいと考えております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

情報提供（座長） ～スライドに基づき説明～

それでは私のほうからこの資料①につきまして、皆さんと読み合わせをしていきたいと思っております。私自身、元々は協働でまちづくりをするということに対して、その重要性を理解していなかったということを最初にお話ししておきたいと思っております。それまでは基本的にはトップダウンで物事がすべて決まっていた。ただ、東日本大震災の復興の現場を見ていますと、やはり協働で多様なセクターが力を合わせて取り組まないと、いざという時にまちづくりは機能しないということを実感しました。今回の新型コロナウイルスのような感染症も、これから多々出てくるかもしれません。そういった時に、市民の皆さんがきちんと繋がり合って、まさに協働して、それがいざという時にも生きてくるものだと思います。もちろんリーダーの力も必要ですし、協働をよく理解した地域人材の育成は欠かせないまちづくりの要素です。ここ数年間、富谷の協働のまちづくりに尽力させていただいた中で、今お話ししたような協働のまちづくりの土壌が、富谷において日々醸成されていることを実感しています。

さて、皆さんにご確認いただきたいのは資料①の「つながり 楽しむ 手づくりのまちづくり」という仮タイトルが付してある原案になります。これは皆様のご意見をもとに、行政側で文言を整えて、さらに、それを皆さんに細かくチェックしてもらい、議論を進めながら作り上げてきたものです。皆さんには、このプロセスにこれまでも参加していただきました。今日は主にこのタイトルを皆で考えて決めたいということです。ただ、例えば、本などを買う時に、本のタイトルパッケージを見て、いわゆるジャケ買いをよくしますが、買って読んでみるとタイトルと中身が違っていたということもあります。そうした点も意識して、タイトルを考えるにあたって、再度、内容の確認をしていきましょう。

まず、1枚目を開いてください。目次の確認です。ここは大きくは変わっていません。最初に目的を書いて、現状と課題を示し、そして協働についての基本的な考え方、協働の推進に向けてという4章構成になっています。

次のページ以降を見ていただきますと、ガイドラインの目的ということで、ねらい、つまり富谷市が何をを目指すのかということを書いています。ここでは、これまでの意見をもとに、ガイドラインという表現を用いていますので、タイトル、サブタイトルのどちらかにはガイドラインという言葉は入れる必要があるとは思っております。



その後2ページ、3ページで富谷市の現状と課題、特に(3)の部分では、かなり議論を重ねた、これから求められることについてまとめています。この部分はわくわくミーティングや審議会の中で、かなり揉んだ部分です。以降は、皆さんに挙げていただいた、富谷の協働において既に実践中の事例をもとに、まとめています。

6ページは協働を進めるための概念図です。協働の概念も変化しています。約20年前に協働が活発化した頃は、主に行政職員と地域住民が当事者とされ、特にNPOが取り上げられてきました。最近では多様な人たちの関わりが協働には重要という定義の変化をもとに、この概念図を作りました。この概念図では、富谷インパクトという表現が盛り込まれています。ここでのインパクトというのは、差という意味で主に使っています。インパクトというと衝撃というイメージがありますけれども、それだけではなしに、地域の課題、社会の課題、行政の課題という、どれも一人で解決するということとはなかなか難しい中、それを連携することによって、すべて解決することはできないにしても、やらなかったよりやったことによってどの位の差があるか、あるいは一人でやるより連携してやったほうが進んだとか、その差をインパクトと表現し、富谷独自の協働の指標を設けたということです。指標の詳細は、地域性や進捗に合わせて、今後さらに練り上げていくこととなります。

8ページと9ページでは、協働を進める際の配慮点、具体的に、協働を念頭においたプロジェクトを進める際の流れについて、これらを、実際に今富谷で活動している皆様の実体験をもとに、このような形でまとめることが出来ました。ただ、様々な事業が始まる時に、すべてこの通りかというのではなく、多様なスタートの仕方があるということは当然のことです。そのため、以降に、富谷で展開されている協働の事例を掲載しています。協働には決まった形というものはなく、地域やその時の社会背景によっても大きく変わってきますし、そこに地域性が生まれてくるのです。ですので、協働には多様な形がむしろ求められています。ここでは、なるべく子どもが見ても、分かりやすいような事例をいくつか掲載することになりました。ほんの一例です。

12ページは、少し堅いイメージになりますが、行政と協働する場合の活動範囲の概念図です。これは、3年前に仙台市が協働のまちづくりの手引きを改編した際に作成したものを、さらに改編してここに掲載しています。仙台市の手引きは私が監修を務めています。元図は、日本のNPOの草分け的存在である山岡義典さんがだいぶ前に作成したものです。13ページ、14ページには、協働の推進に向けて、方針と取組が列記されています。

このあと、若干のレクチャーを行い、タイトルを考えるグループワークを行います。まずは、地域の皆さんに半歩でも良いので協働に関わってもらおうことが、非常に重要になってきますので、内容を踏まえつつも、地域の皆さんにとって自分事となるようなタイトル、あるいは手に取ってもらえるようなタイトル、興味を持ってもらえるようなタイトルを考えていきましょう。

グループワークの前に、少しレクチャーを行いたいと思います。今日お示しするパワーポイントの資料は、一昨年の市民協働セミナーや行政職員研修で使ったものとほぼ同様のものになります。ですので、話の内容は、市ホームページに掲載されている一昨年の市民協働セミナーの報告書で確認することもできます。改めて、協働という言葉一度おさらいしておきたいと思います。

そもそもこの「きょうどう」という言葉は古くから使われている表現ですが、この協力の協に働くと書く「協働」が使われだしたのは平成に入ってからのことなのです。学生に「きょうどう」と漢字で書いてというと、ほとんどが共同となります。これは近世江戸時代以前から使われている言葉でして、地域の集落をどう維持するかという意味で共同体という表現がありますね。地域の連携、つながりです。



それが明治以降に事業者同士が連携する、例えば農協とか漁協とかを連想する「協同」が出てきます。最近の新型コロナウイルスによる経済危機においても、事業者間での、連携する必要が問われていて、協同組合に注目が集まっています。

それに対して今私達が考えているこの協働というのは、自治体の経営が厳しくなった平成期に、主に自治体経営をどうしていくかという文脈で出てきます。ただ、この協働という言葉は、広辞苑において、第6版に掲載されたように、一般的な言葉になっており、他の分野でも多く使われてきています。この協働という言葉は、1970年代にアメリカのインディアナ大学のオストロムさんという学者が提示した言葉がもとになっています。これは「Co」(コ)と「Production」(プロダクション)を掛け合わせた造語で、「コ」とは協力とか共同を指し、「プロダクション」は生産です。これが1990年代に日本に入ってくるのです。研究者の荒木昭次郎さんという方が日本に紹介しました。この時は、地域住民と自治体職員が主体と考えられていました。そのため、協働は行政と一部の市民あるいは一部のNPOが進めてきたということが実際だったわけです。

ただ実際に進めていくにあたって、特に東日本大震災を契機に協働の風向きが変わったと感じられます。最初に日本に協働を紹介した荒木昭次郎さんも、東日本大震災の状況などを見まして、2012年に定義を書き換えています。荒木さんは、異なる複数の主体が互いに協力可能な目標を設定し、その目標を達成していくために各主体が対等な立場に立って、自主自立的に相互交流し合い、単一主体で取り組むよりもより効率的に、そして相乗効果的に目標達成していくことができる手段、と定義を書き換えたのです。協働に加えて、共創という表現も併用されるようになってきました。

それを踏まえて、全国の自治体においても、協働の再定義が始まっています。仙台市では、1999年に作成した条例を、震災後の2015年に全面的に改訂しています。仙台市は、未来の都市経営を支える新たな協働の実践をフレーズに、それを維持するための仕組み、土台となるものとして協働が非常に重要だということで、基本方針として、条例を作り変えました。仙台市においても、現在ガ

イドラインの作成に着手しており、2021年3月の同時期に完成になると思います。



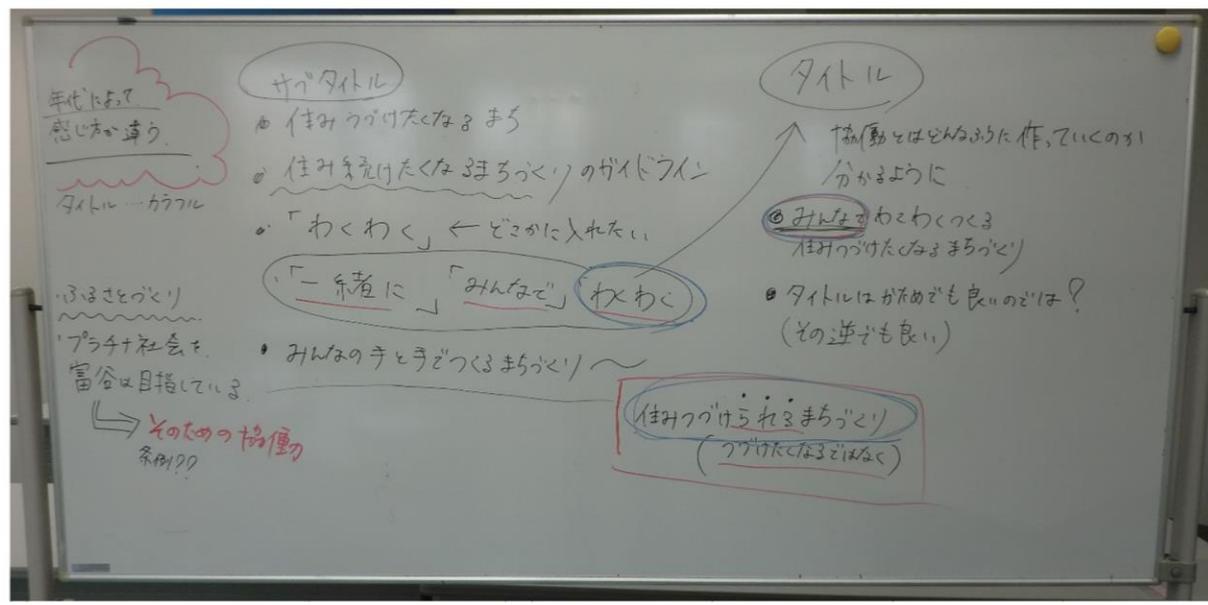
行政が地域コミュニティに直接的に関わるようになったのは1970年代とされています。それまでは住民自治が成り立っていたと思われませんが、高度経済成長期における人口の移動によって、新旧住民が混在していく過密な都市が発達し、農村の過疎という問題も出てきました。そこで政府は1970年代にコミュニティに参与するようになっていったのであり、具体的には、全国各地にコミュニティセンターの設置を進め、また1990年代に入ってくると、NPOの育成、市民団体の支援に本格的に取り組んでいったのです。ここにおられる皆様はこの過程をよく見ているのかと思います。震災後には、この支援の風向きに変化が起きてきて、今度は行政が例えばNPOを育てるとかそういうことではなくて、公共施設を含む場の重要性に注目が集まっています。富谷も「とみから」ができていますね。ここでは、起業・創業に加えて、市民発のプロジェクトが多く生まれています。これが場の持つ力なんですね。もちろんその場にいる人々の存在も重要です。カフェのような雰囲気の中に、まちへの思いや志を持った人々が多く集まって、プロジェクトを今も考えています。そういった場を用意して、そこから協働・共創が生まれていくという段階に入ってきているのが現状です。なお、場は必ずしも室内である必要はなく、屋外の公園なども重要な場となります。

最後に、共感という事をお話しておきたいと思います。人々を結ぶという事には、例えば地域性や事業性があると思います。今後、多様な主体での協働を進めるにあたっては、共感が重要になると考えられます。経済学では、経済学の父と言われるアダム・スミスが、『道徳感情論』という本の中で、この共感の重要性を説いています。共感と同感の違いは認識する必要がありますが、改めてこの共感というものが見直される時代だと思います。人々が響き合うということが、協働のポイントになると考えられます。多様な主体を取りまとめることは容易ではありません。オーケストラを想像してください。多様な役割やリーダーシップ、フォロワーシップのもとに成り立っています。その結果、協奏が成り立ち、感動が生まれるのだと思います。

では、休憩を挟みまして、グループワークに移りたいと思います。



A班



【キーワード】

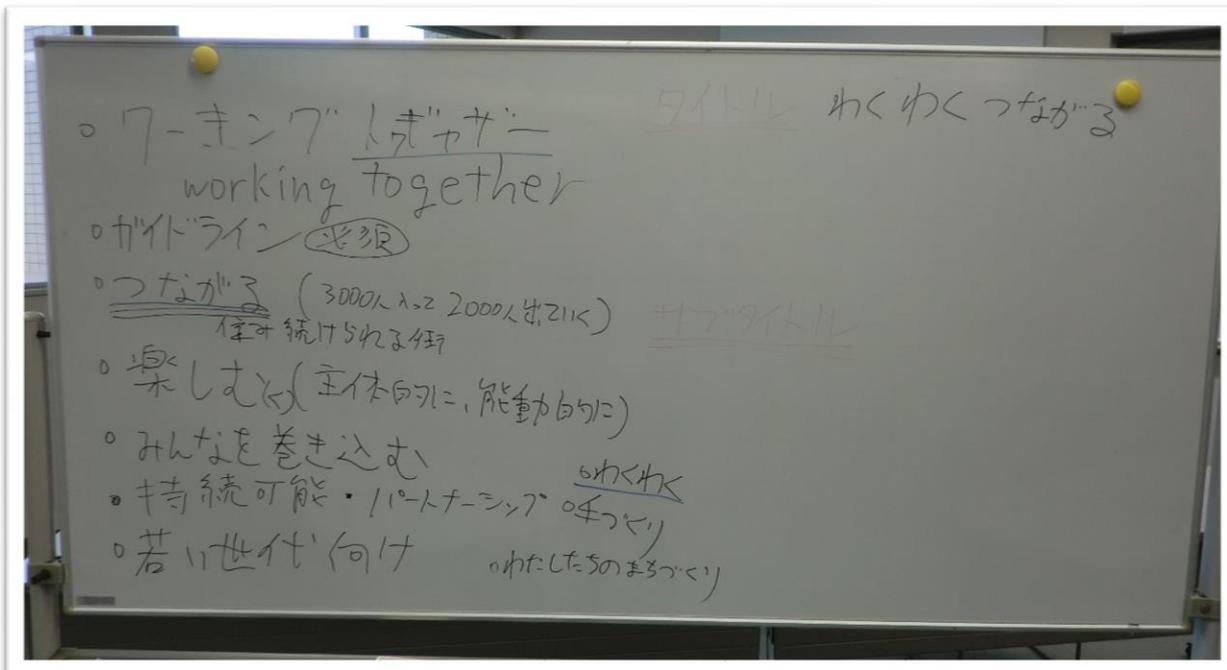
- ①みんなで ②わくわく ③住みつけられるまちづくり

【発表】

この班では、協働とは何かということ、まず誰と誰がやるのか、それは「みんな」ではないかという意見が出ました。タイトルとサブタイトルがすべて決まったわけではないのですが、わくわくしないと楽しくないのではないかと、このこと、「わくわく」という言葉は入れたいという意見が出ました。そして、一番みんなが納得した所なのですが、住みつけられたくなるまちづくりではなくて、年代によってライフスタイルが違うので、子どもからお年寄りまで「住みつけられるまちづくり」という文言が良いのではないかと意見が出ました。



B班



【キーワード】

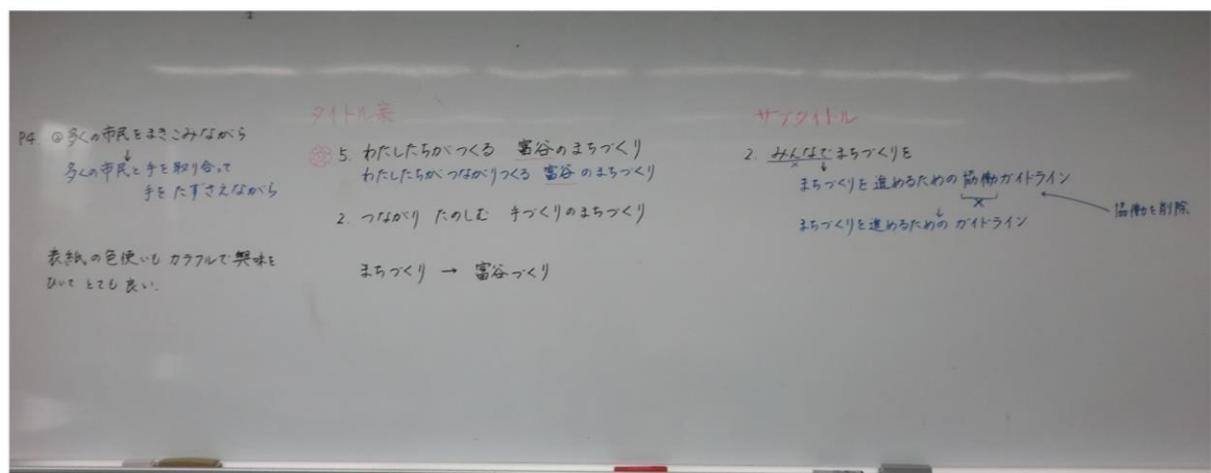
- ①つながる ②わくわく ③トウギャザー

【発表】

私たちの班で、みんなで納得した単語は「つながる」です。前の班で住みつけられるとありましたが、やはりつながって、その活動がその後もずっと続いていくイメージも含めてつながるという単語が真っ先に挙がりました。2つ目は楽しいという言葉が挙がったのですが、わくわくミーティングなどで「わくわく」という言葉が使われてきたこともあって、楽しいということはすごく大事だけれど、楽しいという言葉ではなくて、わくわくを推そうということになりました。最後は一緒にやっていくことが大事だとなったのですが、一番初めに挙げられたのが「トウギャザー」という言葉だったので、一緒にという意味をこめて英語になっております。



C班



【キーワード】

- ①とみや→富谷 ②わたしたち ③つながりつくる

【発表】

この班では、タイトル案については資料③の2番と5番が良いのではないかということで絞りました。5番はわたしたちがつくるとみやのまちづくりとなっていますが、「わたしたちがつながりつくる」、という風につながりを足して、さらに全部平仮名だと緩すぎるのではないかという意見があったので、とみやを漢字に直しました。サブタイトルについても話し合いましたが、みんなでまちづくりを進めるための協働ガイドラインと案には書いてあるのですが、タイトル案にはわたしたちがつくるとあるので、その後にみんなと続くとかどくなってしまうので、みんなを削除してまちづくりを進めるための協働ガイドラインとしたうえで、さらに協働という言葉も私たちは何となくわかるのですが、一般の皆様から見た時に、ちょっと堅いというか、一瞬立ち止まってしまうきっかけになってしまうのではないかということで、協働をあえて外して「まちづくりを進めるためのガイドライン」として、中身を見たら協働とある形が良いのではないかとりました。キーワードとしては「とみやを漢字にすること」、「わたしたち」、「つながりつくる」の3つです。



【タイトル案】 わくわく つながる わたしたちのまちづくり

【サブタイトル案】 富谷の協働ガイドライン

【座長より】

皆さんから3つのキーワードを出してもらい、3班とも「つながり」または「つながる」、「わくわく」は入れていきたいということ、それぞれのチームでテーマに対してどういう議論があってこれらの文言が出てきたのかということ共有意識を共有いたしました。今、時間をいただいて我々審議会委員で議論をしましたが、出てきた案を発表して皆さんにお諮りしたいと思います。皆さんのキーワードを我々が紡ぎ合わせたということになります。サブタイトルをきちんとしたほうが良いのではないかという議論が3つのグループで出ていたようで、メインタイトルを子ども達でもわかるようにしております。「わくわく」と「つながる」という表現が圧倒的に出ていますので、タイトルの最初に入れました。「わくわく つながる わたしたちのまちづくり」。審議会委員の皆さんもやはり「富谷」は入れたいということで、Cグループからもありましたが、漢字で「富谷の協働ガイドライン」となったところです。



【参加者からの意見】

- わたしたちのまちづくりではなく、みんなのまちづくりという文言のほうがつながる感じがして良いのではないか。
⇒協働のまちづくりで重要なのは、自分事にしていくことであり、どちらが主体的な表現なのかを考えていくと良い。(座長)
※その後、参加者での再協議の結果、当初の案通り「わたしたちの」まちづくりとなった。
- まちづくりという表現は一般的な表現なので、他の市町村だったとしても使えてしまう。富谷のまちの課題を踏まえ、どんなまちづくりをしていくのか、改めて条例を作る場合は別だが、その色合いがあったほうが良い。グループワークで住みつづけられるまちということが大事だという意見があり、指針案にもSDGs（エスディー・ジーズ）やESD（イーエスディー）、プラチナ社会の視点を踏まえるとの記載があるので、それらの内容を具体的に盛り込むと良いのではないか。
⇒住みつづけられるまちづくりと入れた場合、住環境の意味合いが強くなるイメージがあったので、まちづくりという文言にしておくことによってある程度どんなものでも包含される。協働のまちづくりはテーマではなく、何をやるかということより人々がつながることがこのガイドラインとしては重要で、すべての部署の土台になるものなので、住みつづけられるまちづくりという文言は総合計画にも同様の表現があることから、ここではシンプルな表現に留めることになった。(座長)